

来むと言ふも来ぬときあるを來じと言ふを來むとは待たじ來じと言ふものを

大伴坂上郎女

『万葉集』卷四「相聞」の一首。

「来るよと言つたつて来ないときがあるあなたもの、
来ないと言つてゐるのを、もしや来るかも、なんて待つたり
はしないわ。だつて来ないと言つてゐるんだもの」。

来るとか来ないとか、はあー、何言つてんの。と思ひな
がらついつい何度も読んでしまう。そのうち声に出して読
んでしまう。来む・来ぬ・来じ・来む・来じ、と「来」が

くるくる入れ替わる早口言葉みたいなおもしろさ。それで
いて、だんだん切なくなる。拗ねてゐるよう見せかけな
がら、じつは待つ心をひそかに訴えているのだ。こんな歌
をもらつたら、にんまりして男も会いにゆくだろう（空氣
が読める男なら）。

大伴坂上郎女^{おおともさかのうえのいらめ}は、旅人の異母妹で家持の叔母。十代で
かなり年長の穗積皇子^{ほづみのみこ}に嫁ぎ、その後、大伴宿奈麻呂^{すなまろ}と

結婚して、家持の妻となるおおいらめ大姫を生んでいる。

この歌は、藤原麻呂（不比等の子）との贈答歌のなかの
一首。穗積皇子亡きあと、宿奈麻呂に嫁ぐまでの時期で、
おそらく二十代前半だらうと推察される。

麻呂からの贈歌のなかには、こんな歌。

むし衾なごやが下に伏せれども妹とし寝ねば肌し寒

しも

「温かい布団にくるまつて寝てゐるけれど、あなたとの
共寝ではないので、寒くて仕方がない」。

上句を生かした肌感覺の新鮮さはあるものの、郎女の才
氣にはとうてい及ばない。待つ女の切ない心情を滲ませつ
つ、決して男にへりくだりはしない、艶やかでしたたかな、
そして機知に富んだ郎女の返歌の手腕に驚く。

郎女はこののち、兄・旅人の死後、まだ少年だった家持
の後見を果たしながら大伴家を支え、上級貴族・大伴家の
文学サロンの中心的存在となる。少年・家持の歌の手ほど
きをしたのも郎女である。『万葉集』の蔭の立役者は、あ
るいはこの人なのかもしれない。

（小島ゆかり）

